

令和4年度第2回認知症対策推進会議 議事録

開催日時：令和5年1月27日（金）18時00分～19時30分

開催方法：オンライン会議

【委員（五十音順・敬称略）】

（出席者）

阿部 和也（仙台市地域包括支援センター連絡協議会）
阿部 哲也（社会福祉法人東北福祉会 認知症介護研究・研修仙台センター）
伊藤 あおい（特定非営利活動法人宮城県グループホーム協議会）
小牧 健一郎（一般社団法人仙台歯科医師会）
佐々木 薫（認知症介護指導者ネットワーク仙台）
佐々木 葉子（公益社団法人宮城県看護協会）
鈴木 佐和子（宮城県老人保健施設連絡協議会）
清治 邦章（一般社団法人仙台市医師会）
高橋 利行（特定非営利活動法人宮城県ケアマネジャー協会）
高橋 将喜（一般社団法人仙台市薬剤師会）
丹野 智文（おれんじドア）
福井 大輔（みやぎ小規模多機能型居宅介護連絡会）
最上 啓史（仙台市老人福祉施設協議会）
山崎 英樹（仙台市認知症疾患医療センター いずみの杜診療所）
若生 栄子（公益社団法人認知症の人と家族の会 宮城県支部）

（欠席者）

岩渕 徳光（社会福祉法人仙台市社会福祉協議会）
大嶽 友和（仙台弁護士会）
原 敬造（一般社団法人仙台市医師会）
南 研二（宮城県精神保健福祉士協会）

【事務局】

仙台市健康福祉局

各区保健福祉センター障害高齢課

【オブザーバー（順不同・敬称略）】

仙台市認知症疾患医療センター

仙台西多賀病院 認知症疾患医療センター長 大泉 英樹

東北福祉大学せんだんホスピタル 認知症疾患医療センター長 高野 毅久

東北医科薬科大学病院 認知症疾患医療センター長 古川 勝敏
仙台市健康福祉事業団介護研修室室長 杉山 みき
宮城県保健福祉部長寿社会政策課地域包括ケア推進班 川村 健吉

【会議概要】

- 1 開会
- 2 報告

事務局からの説明に入る前に、山崎議長より次の確認があり、委員より了承された。

○会議を公開とすること。

○議事録署名人を、清治委員とすること。

続いて、今回から新たに委員となる阿部和也委員より自己紹介いただいた。

(阿部和也委員)

仙台市地域包括支援センター連絡協議会（以下、包括協）の副会長を務めている。このたび前任者が配置換えとなり、引き続き包括協としての立場で本会議に参加していきたい。普段より認知症対策として、地域包括支援センターで様々なことに取り組むよう努めているが、やはり新型コロナウイルス感染症禍の影響で、認知症カフェのように気軽に集まっておしゃべりをするというような場が途絶えているような状況が続いている。認知症のご相談が入ると、以前であれば、認知症カフェのようなところへ気軽にご参加いただくようご紹介をし、そのような場で、ご本人やご家族ともに、ゆったりした感じでご参加いただく中で相談のような場を持っていたところが、コロナ禍の影響で、集まって飲食するというようなカフェ形式の実施が難しいところであった。今後、その新型コロナウイルスの分類の見直しがかかりそうな流れもあるので、そういった場をまた再開していくことを考えていかなければならないと思っている。

一方で、オンラインを活用した形で、自分や身近な方についての心配事を、似たような立場の方々同士でのおしゃべりを通じながら、お互いのことを話して考えていくオンライン形式での認知症カフェを実施した。オンラインならではの話しやすさもあるように感じられたので、オンライン形式での認知症カフェも進めていきたいという考えもあり、一方で集合形式での認知症カフェも再開したいという考えもある。本日は、委員の皆様のご意見、取り組みを聞かせていただき、勉強させていただきたいと思っている。

(山崎議長)

それでは次第2の「報告」に入りたい。「令和4年度普及啓発に関する取り組みの実施状況について」事務局から報告をお願いしたい。

事務局より【資料1】について報告がある。

(山崎議長)

ただ今の事務局からの報告のなかで、丹野委員と若生委員の名前があった。両委員からからコメントをいただきたい。まず丹野委員よりご発言をお願いしたい。

(丹野委員)

今お話いただいた企業向けセミナーだが、当事者3人で会話をさせてもらった。このセミナーの後で認知症観が変わったか、変わらないかについてのアンケートがあったが、変わったという方が91%だったが、9%の方は変わらなかった。なぜ9%の方が変わらないのかなと思ったが、やはり自分の家族に認知症の方がいると、その方と私たちがあまりにも違いすぎて、おかしいと思うところがあるのかなと思う。家族に認知症の方がいると、自分の家族だけを見てしまって、なかなか認知症観が変わらないということがあるのではないか。

あともう一つ、認知症サポーター養成講座を小中高校向けにやっているとのことだが、実は私は、高校の家庭科の教科書の1ページに載っており、昨年その教科書を扱っている学校である宮城県立泉館山高校の6クラスにて授業をさせていただいた。それがきっかけとなり認知症のイメージが大分変わるのかなと思った。また高校生からは、教科書に載っている人で生きている人を初めて見た、と喜んでもらえたのでよかった。

(山崎議長)

続いて若生委員、発言をお願いしたい。

(若生委員)

報告にあった損害保険会社（以下、損保会社）社員向けの認知症セミナーに参加させていただいた。損保会社の方たちは、認知症のご家族や本人とも接することが多いと思う。このセミナーは、認知症に関わる人達、認知症の本人や家族の声を聞くことで、改めてどのように寄り添っていったらよいかという学びの機会になったのではないかなと思う。その中でも、丹野委員もおっしゃったように、古い認知症観というか、何かしてあげなければいけない、というような認知症観をお持ちの方も多かったのではないかなと思う。これを機会に、新たな認知症観を持っていただきたいなと思った。

それからもう1点、私ども「認知症の人と家族の会」も、11月の仙台市介護予防月間に参加し、世界アルツハイマーデー記念講演会を実施した。今年は「ぼけますから、よろしくをお願いします。～おかえり お母さん～」という映画を上映した。当日は201名の幅広い年代の方に参加していただいた。参加者より、アンケートで貴重な言葉をいただいたので紹介したい。「認知症を抱えていても、その人のライフヒストリーは残っていく。その人の経験から学ぶものは多い。いつか自分が直面したらと考え、無関心ではいけない。今から行動を始めないと暮らしやすい社会にはならない。個々のニーズと個性の尊重など、多様性のある施策、取り組み、活動を考えていく必要がある」というものであった。

そして、映画上映後の話し合いの中でも、参加者より貴重な言葉をいただいたのでこちらでも紹介したい。「そこにいていいという思い、そういう思いに考えさせられた。自分がこうした思いや生き方に対して、今から何ができるかと強く考えさせられた。」というものであった。

(山崎議長)

認知症の方が身近にいる人ほど認知症観が変わりにくいのでは、という話を聞いて、確かに医師ほど認知症観が変わりにくいというようなことも言われるが、自身のことも考えてみると、先の報告の中のアンケートでも出てきた、認知症観が「変わったか」「変わらないか」の二者択一に「認知症観が広がったか？」という選択肢を加えてもいいのかなという気がする。私は、認知症のいわゆる高度重度の方々と、精神科病院の中での出会いから始まったので、それが最近になり本当にその認知症観を広げていただいたというか、変わったと言えば変わったのだが、もしかすると広がったというような選択肢があったら、もう少し（先の報告に出ていた損保会社社員向けの認知症セミナーに参加した）皆様はそこに「○」をつけたかもしれないなという気がした。

それでは、他にご発言されたい委員はいるか。

いないようなので、続いて3の議事「さらなる普及啓発に向けた取組みについて」に入りたい。今回事前に、事務局から委員の皆様よりご意見をいただきたい二つの議題をお伝えしている。一つ目は「認知症サポーターの活動の場創出について」、二つ目は「認知症のご本人・家族へのインタビュー動画制作について」である。それぞれの概要等について事務局から説明後、委員の皆様よりご意見を頂戴したい。ではまず、1つ目の議題「認知症サポーターの活動の場創出について」事務局から説明をお願いしたい。

(事務局)

事務局より【資料2】について説明がある。

(山崎議長)

では阿部哲也委員よりご発言をお願いしたい。

(阿部哲也委員)

自身は認知症介護研究・研修仙台センター所属ということもあり、あまり直接地域での活動やサービスをやっていないため、やや理想的な発言になってしまい申し訳ないが、先ほど事務局から話があった、仙台市における認知症サポーター活動状況についての説明のなかで、地域包括支援センターのヒアリングから把握した状況というのがあった。また、他の政令市での活動も見させていただいた。やはり仙台市が、認知症施策推進大綱や或いは認知症とともに生きるまちづくりを進めていく上で、おそらく様々な取り組みが仙台市にはあると思う。今はカフェ等だと思うが、そのような仙台市が行う様々な取り組みのお

手伝いやボランティア等を、認知症サポーターにやっていただくというのが一番理にかなっているのではないかと、他の政令市の動きを見て思った。

仙台市がこれからどのような取り組みをしていくかによって、認知症サポーターにどのような活動してほしいのかがまた変わってくるのではないかと。例えば、岩手県滝沢市でやっているスローショッピングをご存知の方もいるかと思うが、スローショッピングではスローなレーンを作って、そこでサポーターの方が、ゆっくりと一緒にパートナーとなって見守っている。また、RUN伴ではRUN伴での活動の仕方がある。仙台市がこれからどのような取り組みをするかによっても、(認知症サポーターの今後の活動の場がどのようなものになるか) 違ってくるのかと思う。

もう一つ、とある知人より父が認知症かもしれないという話を聞いたのだが、その知人はまずどこにどう相談すればいいのかがわからないと言っていた。自身はたまたまこのような領域にいるので、地域包括支援センターがあるとか、認知症疾患医療センターがあるという話ができるが、おそらく普通その地域の中で、家族に戸惑いがあったときに、いきなり専門家に相談するというのはかなり距離がある。すぐ近隣に、生活に密着したオフィシャルな相談員がいたらいいと思う。それは町内会でもよいし、或いは民生児童委員や、民生児童委員と少し連携したような立場でもよいが、まず地域包括支援センターや専門家に行く前に、ピアな相談を近所にいる認知症サポーターに担ってもらうこともよいのではないかと。

あともう一つは、社会資源やサービスを、一般の立場から教えて専門家に繋ぐ役割を認知症サポーターに担ってもらうのもよいのかと思う。その際に思いついたのは、仙台市で作っている認知症ケアパスである。認知症ケアパスの冊子を置いただけではおそらく手に取って読もうと思う方はなかなかいないのではないかと。それを説明したり、紹介したりする人が必要なのではないかと。認知症サポーターにケアパスを活用してもらい、専門家に繋ぐまでの間の何らかの支援をしていただけるとすごくよいのではないかと。

(山崎議長)

続いて、高橋利行委員の方からご発言をお願いしたい。

(高橋利行委員)

阿部哲也委員と同様のことを考えていた。やはり、いきなり病院とか専門医とか様々なところへ紹介されるよりは、最初に話を聞けるという、例えば、近隣で民生委員や町内会長と繋いでくれて、その前に認知症サポーターの方がいろいろ話を聞いてくれて、まず寄り添っていただけるような活動が地域でできたらいいのではないかと。あとは、いろいろな立場や立ち位置もあると思うので、それぞれの立ち位置、同じ目線で話ができたり聞けたりするという、例えば学生なら学生、企業なら同じような企業とか、やはり同じ目線だからこそ響いてくることもあるのかなと思うので、そういうところもできるのではないかと。

あとは、少し話がずれるかもしれないが、先ほど認知症の方が身近にいる人ほど認知症観が変わりにくいのでは、という話があった。この認知症サポーター活動の最初の資料の2ページ目のところにも「介護従事者の認知症対応力向上」というものがあったのだが、介護現場の方が認知症サポーターとか、もしくは認知症を正しく理解をした方が、偏った考え方で当事者を見るのではなく、また、認知症とひとくくりにするのではなく、その人の大変さを理解して努力するという、同じ目線で関わるとよいと思う。単なる1スタッフというよりは、認知症サポーターとか、認知症の正しい理解をした方がお話をするなどの活動ができると、より良くなっていくのではないかなと思う。

(山崎議長)

続いて、仙台市医師会の清治委員にご発言お願いしたい。

(清治委員)

仙台市医師会としても認知症についてはとても大事なことだと考えていて、先ほどの他の政令市で行っている取り組みの中で、診察の同行とか、或いは患者さんの診察の見学とかというようなことが、そういう認知症サポーターのニーズがあるかどうかまだわからないが、もしそういったニーズがあるのであれば、或いは認知症サポーターの方々に、認知症の専門的な研修等、医師からの専門的な話といったそういうニーズがあれば、ぜひ協力させていただきたい。

あとは、先ほど認知症観が変わるか、あるいは変わらないかとか、それから認知症観が広がる、という内容のお話があった。私自身現在、訪問診療をしているのだが、そうするとどうしても、例えば市営住宅に1人住まいで完全に引きこもりのような、そういう認知症の方がいた場合は、ケアマネジャー等を含めたチームの皆で「外に出よう」と声掛けをするものの、あまりそういうことに積極的になれなくて、引きこもっているのが果たして「その人らしさ」として許されるものなのかどうかということ等、そのあたりが最近の悩みとなっている。その辺りも、委員の皆様より様々な意見をいただきたいと思っている。

(山崎議長)

他に発言したい委員がいなければ、次の議題に入る。ご本人、家族のメッセージ発信について、議題、意見交換に入る前に、まず、東北工業大学制作の動画、その優しさは誰のためなのかをご覧ください、この動画の制作に携わっておられる福井委員よりご発言お願いしたい。

(福井委員)

今回、この動画について、東北工業大学「認知症の人と環境研究所」で丹野委員と一緒に、外部委員をとという形で携わっている。今回丹野委員の発想で、認知症の人のスマホを使ったまちあるき、という認知症の人でもスマホ使いこなせれば困らずに外出できるので

はないかということで、大学生の皆さんにご協力いただき、自身の事業所である「アンダ
ンチレジデンス」という高齢者住宅から6名と、小規模多機能ホーム「福ちゃんの家」か
ら1名、合計7名に参加いただき収録させていただいた。

今回、仙台市で動画を作るということだが、まずはどういう方にこの動画を届けたいの
かというところが一番大事なかなと思う。仙台市も、認知症になっても安心して暮らせるま
ちづくりを掲げており、この「安心」というものと、「安全」というものをしっかりとら
えないといけないと思っている。

「安全」だと身体的安全性なのか心理的安全性なのか、身体的安全性に傾くと、リスク
管理になってしまい、認知症の人がよく徘徊するのでカギを締めしようとか、そのような
施設介護等になってしまうこともあるので、やはり安心して暮らせる街というところ
では、介護職員も含めてそういった部分の理解を浸透させていく必要があると思う。

丹野委員もインタビュー中で「自立」についておっしゃっていたが、自身も事業所のス
タッフに東京大学の熊谷晋一郎という医師、脳性麻痺の当事者として現在小児科医として
働いている医師のお話をよく伝えているのだが、自立というのはすべて何もかもを自分で
できるという必要はなくて、依存先を増やすこと、助けて欲しいときにすぐに言えるこ
と、そのような依存先を増やしていくということが大事ということを話しており、何もか
もを自分でやる必要はなく、自分の言葉で伝えられて表現できるという支援をしていく
ことが大切だと伝えている。認知症の本人は当然困って苦しいという思いもあり、そのご家
族のほうも昔の親と現在の親の様子を照らし合わせて、こんなにもできないの？というよ
うな、心のゆとりがなくなるとイライラ感が出てしまうのではないかなと思う。

先の報告にあった、損保会社のセミナーで9%の方の認知症観が変わらなかったとい
うところがあったが、本当はその9%の方々に伝えるべき動画を今回仙台市として何か作っ
ていくとよいのではないかなと思っている。自身は少しずつ地域に迷惑をかけようと、ス
タッフも伝えていて、いろんなところに出かけながら、不便なところなどをその地域の人
にも伝えて理解してもらうというような取組みもしているので、そういった部分のターゲ
ットと、どういう部分をしっかりと伝えていくかというのを、試行錯誤をしながらでもいい
と思うので、発信できると裾野も広がっていいのかなと思う。

その認知症の人が活躍する場を作っていくという視点でいうと、少し前に SNS 上である
介護事業所の代表の方が言っていたのだが、介護事業所に来ている認知症の利用者が稼い
でいいのかというような話がある。事業所でプランに落とし込んで、ものづくりをして、
それを売る、というところのプロセスまでが認知症ケアだよねということで、ただこれは
自治体によって判断が違うようであるが、そういうことについても仙台市として、それも
認知症ケアとか、取り組みとして生きがい作りなんだよというふうに、個人的には示して
欲しいなというのものもあるが、何かそういうところも含めて考えていただきたいと思う。

あと、「せんだい Tube」の方で発信してくことについて、今日も見てみたのだが「せん
だい Tube」、1.6 万人登録者がいるが、動画によっては再生数が 100 回にも届かないもの
もあるので、発信の仕方について工夫が必要になってくるのかなと思う。

あとはぜひ、まちづくり政策局とか、都市整備局とか、市民局とか、その横の連携がもっと必要で、まちづくりを考えるときにはもう高齢化社会のことを横には置けないと思うので、そのような横串的な動きというのもより必要になってくるのではないかと思っている。昨年7月まで仙台市の都市計画審議会に入れてもらっていたが、そこには健康福祉局の人はやはり出ていなかった。定禅寺通りのビルの建て替えや、ベンチを増やしていくとか、そういう話し合いをしている。高齢者の人が来て、ゆっくり休むところがある場所づくりをしているとか、そのような仙台市の施策とも絡めて、認知症の人でも街に出やすい環境になってくるとか、こういうのも示しながらやっていくのもいいと思う。あとは、そういった動画とかを広めるという意味でも、各区のまちづくり協議会のようなものが何かあると思うので、仙台市はやはり大きいので各区にも施策を落とし込んでいくことも必要なのかなと思う。まずは、コンセプトでどの方に届けていくのか、或いはどういう形なのかとか、あとは、認知症の方で落ち着いて暮らせるようになるまでどのようなプロセスを歩んできたとか、あとは、暮らすための創意工夫の動画集などがあればすごく面白いと思う。そういったところでも、今後もこれからだと思うのでぜひ私たち事業者もまぜていただきながら、いい形の情報発信をして、より住みやすい仙台市、あるいは、宮城県とか東北とか、日本全国に広がっていけるような、そういった取り組みができればいいのかなと思う。そういうことがしたいなと思う。

やはり動画制作をしていくなかでは、大学生の皆さんと一緒に楽しみながら話しているのが一番よいなと思った。それで、結果的によい動画ができたなと思う。

(山崎議長)

では、続いて事務局より、認知症のご本人、家族へのインタビュー動画制作についての説明いただきたい。

(事務局)

事務局より【資料3】についての説明がある。

(山崎議長)

この議題に関し、まず丹野委員と若生委員にご発言をいただきたい。
では、まず丹野委員からご発言いただきたい。

(丹野委員)

この動画を作るときは、やはり前向きな発言や言葉でなければ駄目だと思う。家族の言葉を入れるのはいいことだが、それを聞いた本人が落ち込むような言葉が入っていたら、それは何の意味もないと思う。でもそれは、意外と家族としては悪気もなく良かれと思言っている言葉かもしれない。本当に多いのが「この人はなにも喋らないです。何もできなくなりました。私(家族)は大変なんです。」というような動画。このように家族自

身の辛さを伝えるようなものだったら、そのような動画は作らないほうがいいと思う。

それよりも、どのようにして本人が元気になったのかを伝えるものであるといいと思う。認知症になって最初から元気である人はいなくて、必ず落ち込む。でも這い上がる力があるということを自分は信じて今活動している。家族から見て、本人がどうやって元気になったのかということ伝える動画だったらいいと思う。どうしても、自分の辛さ、大変さを訴える家族の映像が、県外にも多いと思う。

先ほどのグーグルマップを使ったまち歩きは、熊本の徘徊模擬訓練をやっていた人たちが、自分たちが高齢者になり認知症になったときに「見守られたくない」と言っており、見つけられて家に連れ戻らされるのが絶対嫌だと言っていた。

それから、徘徊模擬訓練でなくて、1人で帰ってくるようにするにはどうしたらいいか、1人で帰って来られるようになった方がいいのかなと思いグーグルマップでの街歩きを考えた。

今まで、他の県とかでつくっている映像をもとにすると、やはりまだまだ古い認知症観で出来ている気がするので、仙台市独自で、本当に新しい認知症観で作ってほしい。本人も家族も元気になって、笑顔になるような映像にしてくれないのかなあと思っている。ぜひ、前向きな話や発言の者にしてほしい。あとは、地域の人にもこういうのに参加してもらうのもよいと思う。でも見守りと言いながら、ほとんどが監視になっている。私の仲間たちもそれを言っている。私の仲間たちの中で一番嫌だと言っているのは、子供扱いされる、1人で出かけるのを禁止される、財布を取り上げられる、この3つ。

仙台市が作ろうとしている動画を観ることで、本人たちが「財布を持っていてもいいんだな」とか、「1人で出かけても大丈夫なんだな」と思えるような映像になってくれたら嬉しいと思う。

(山崎議長)

続いて若生委員からご発言をお願いしたい。

(若生委員)

やはり家族の思いというのは複雑というか、なかなか前向きにというのは、難しいところもある方もいるのだが、やはり認知症の本人と家族という、その閉ざされた空間というか、その2人の関係の中ではやはり不安や心配で、どうしても本人の自立というのは、なかなかうまくいっていない。本人の自立支援というのはなかなかうまくいかなくて、なんとか家族が本人のために良かれと思って守ってしまう、ということが現実にあるのが現実だ。

ただ、その自分の家族だけではなく他の家族と出会うことで、そして他の認知症の方を第三者的に見ることで、自分の今までの関わりは、どうだったのだろうか、実際に、他の家族や他の方にと出会うことで、変わっていく家族がある。家族の方がどうやって自分が変わったのかということ、動画の中に盛り込んでいただければいいのかと思う。家族

も変われるということ、変わるまでにどういうことがあったのか、どういう経緯で自分が変わったのかという、いい例を動画で紹介していただきたい。

それから先ほどの動画の中の、東北工業大学の石井先生の言葉で「環境を整えることの大切さ」というものがあった。これは本当に同感で、環境が整っていれば安心して本人も街に出られる。家族も、街に出ることを本人に託せるという思いを抱いていただけるのかなと思う。

実際に私が昔、車椅子を使っている方が地下鉄の階段を上りたいと言っていた時に、車椅子で登れる設備があるのに、出していなかったということがあった。あるのに出していなかった、と。設備が整っているのに、それを使うということを、あまり考えてなかったということがあったので、やはり動画というのは、まちづくりをする方々、街の方々、商店の方々にも観ていただき、まちの環境を整えていくということが、やはり本人の自立を支援することになるのではないかなと思う。

(山崎議長)。

では佐々木薫委員からご発言をお願いしたい。

(佐々木薫委員)

アプリを使っているいろいろなところへお出かけをしているという取組みはすごくいいなと思う。やはり自立が大切で、子ども扱いされずに自分で動ける方は自分で動いていただければいいのだと思う。そこで、認知症サポーターの養成についてであるが、養成者数を増やせばいいといいものでもない。認知症サポーターは沢山いらっしゃるので、情報をデータベース化してもらえないか。例えば、認知症サポーターでも「知識として身に付けたい」という人もいるだろうし、認知症サポーターとなって「何らかの役に立ちたい」という人もいるのではないかなと思う。どのような認知症サポーターになりたいのかというのを一度調べてもらうのもいいのかなと思う。例えば、地域住民の方からいろいろお話を聞いているが、パソコンや携帯、スマホを使いたいんだけど、使い方がわからないという方もいる。また、買い物に行った時にセルフレジでの支払いになると、支払いの仕方がわからないというような声がある。何とか身近な人で教えてくれる人がいないものかな、という話がある。先ほど、(令和4年度累計の)仙台市のサポーター養成者の約7割が学生さんとのことだった。学生さんは結構スマホを使いこなしており、アプリもよく使っているのではないかなと思う。我々がわからないところは、そういう人たちが登録して、例えば、スマホとかアプリの使い方を教えてくれる。ここに繋がれば、すぐに教えてくれるというようなものがあるといいのではないかな。あとはレジでの支払いについて、例えばスーパーにも認知症サポーターを登録しといても、そこでレジの使い方を教えてくれる人とか、なかなか今企業も厳しいので、職員がくっついて指導までしてくれるところはそう少なくなってきたので、そういう活用の仕方とかができるのであれば登録しておくともいいのではないかな。認知症サポーターの得意な分野を把握し、それをデータベース化して、そういうマッ

チングできるような体制にすると非常によいのではないかと思います。認知症サポーターの登録をきちんとし、そこまでやりたくない人はそこまでしなくてもいいのだが、やれる人・やりたい人がいるのであればそのような認知症サポーターを活用することがすごく有効なのではないか。一つはそういうところを考えていただいてもいいのではないか。

それから、認知症サポーターはどこかに所属してもらってもいいのではないかと思います。例えば、地域包括支援センターに、その近隣にお住いのサポーターが登録しておいて、困ったときに、相談や見守りをしたり、スマホやアプリの使い方を教えてくれたりするという形でもよいのではないか。

それから、認知施策推進大綱にはグループホームの記載があり、要は地域の拠点で活用しましょうというのが大綱の中に掲載されている。グループホームに認知症サポーターを配置しておいて、サポーターの方に様々な活躍していただくというやり方もよいのではないか。あとは、地域包括支援センターには、認知症地域支援推進委員も配置されているので、そこうまく紐づけるとか、今ある機能を連携させる、少し工夫してデータ化していく、ということをしていけばさらによくなるのではないかと思います。

それから、つい最近たまたま「ハートネットTV」という番組を観たのだが、北海道で「お助けカード」、「希望のカード」というようなものを持っていて、してもらいたいことを、その場でお手伝いしてくれるというような事例が紹介されていた。確か国でも制度が去年から制度化されているので、仙台市でもそのようなことをやる予定があるのかを聞いてみたいと思う。あとは、認知症伴走型支援事業というのが、昨年から予算化されているはずなのだが仙台市ではそういうのもやられる予定があるのかどうかということを知りたい。

(山崎議長)

事務局の方からご発言お願いしたい。

(事務局)

様々なご意見いただき、大変ありがたく思い伺っていた。

伴走型相談支援の取り組みに関して、制度として準備がされているところで、検討はしているというのが正直なところだ。まだ具体的には決め兼ねているのが実態となっている。認知症の方の相談を地域包括支援センターに担っていただいているが、やはり業務が非常に多忙ななか幅広い業務を担っていただいていると思っているので、加えて、地域の資源というところで、グループホーム様の協力を得るとするのは、とてもよい取り組みだと思っているので、この考えは検討していきたいとは思っている。進んだ際には関係する方にはご相談していきたいと思っている。

(山崎議長)

この議題に関して、伊藤委員から何かご発言お願いしたい。

(伊藤委員)

動画内の丹野委員のインタビューや、おしゃれな映像がとてもよいと思い拝見していた。今後のいろんな動画作成するというで少しお話させていただくと、若者だと結構動画を観ている。20代10代の若者たちはテレビや自分のスマホでも、YouTubeに繋いでいろんな動画を観ている。いろんな動画を観ており、グループホームの日常を動画にしてYouTubeにアップしているものもあり、それを観たスタッフは「何かほっこりしていいね」と言っていた。丹野委員がグーグルマップを使い自分で調べて、目的地に1人でたどり着くというような冒険、挑戦もののようなYouTubeを結構今どきの若者たちは観ている。若者たちに、認知症の方に限らず、いろんな人たちがいるんだよということも含めて、あまり硬い感じの内容ではなくて、いろんな世代の方に見ていただけるような動画だと、若い人も見やすいし、入りやすいと思う。動画を見た若者たちが、その動画をきっかけとして、例えば街でスマホの使い方がわからなくて困っている人などがいたら声をかけてみようかな、というきっかけになるような動画になってくれればなと思う。

(山崎議長)

今事務局の方から説明があった資料の中に、動画のコンセプトが二つあり、これを読まさせていただいた時に本当に素晴らしいと思った。「認知症の人が前を向いてその人らしく生きることができると感じられるもの」と、その次の、その「認知症の人ではなく、それぞれの考えを持った人であると感じられるもの」と、これは大変に深い哲学というか見識だというふうに思う。ぜひ、このコンセプトに沿った動画ができることを期待している。

では、議事に戻るが「4 その他」委員の皆様より何か質問、報告等はあるか。

では、若生委員ご発言お願いしたい。

(若生委員)

地域の方からの声ということでお伝えしたい。「仙台市認知症の人の見守りネットワーク事業」について、その協力者として登録している方からの声であるが、いなくなった方の情報を受けて、どうしたのだろうなというふうに思っているのだが、「自分には何もできない」というジレンマを感じているとのことだった。自分の地域だったら何とか動こうかと思うのだが、他の地域とあの情報量では動きようがなく、ただただ大変だなと思うばかりで、何とか力になりたい、支援したいと思っても、現状では見つかることを祈るばかりだという声を聞いた。このような声があることを本日の会議にて伝えたい。

(山崎議長)

他に発言はあるか。

5 閉会

(山崎議長)

他に発言がないようであれば、議事終了とする。

【議事録署名人】

(議長)

(委員)
